

喜多方市のJ.R喜多方駅 からは「他産地と比べ甘味 前にある落花生・豆菓子販 売の「おくやヒーナツ工 場」。店舗二階の会議室に 議論が飛び交う。おくや社 長の松崎健太郎(左)、市内 調理場、企業の新員食卓か ら出る生ごみを原料に荒川 社長の荒川健吉(右)ら両社 関係者の会合だ。

おくやは福島民報社が主 催する「ふくしま経済・産 業・ものづくり賞(ふくし ま産業賞)」で第二回特別 賞、荒川産業は第三回特別 賞を受けた。両社を率いる 若き実業家一人には、「会 津循環物語」という共通の 夢がある。

おくやは昨年冬、「循環 型落花生」と命名した落花生を初めて商品化し、コープあいつの八店舗で百十号 入りと二百二十号入りの計 三千袋を完売した。消費者

連携①

会津で出た生ごみを基に 農産物を作り、住民や観光 客に提供する。得た利益は 地元企業と農家に還元する 仕組みのモデルを構築した

おくや、荒川産業(喜多方)

# 英知集め新事業

「ふくしま産業賞」経済、産業、ものづくりの部門 により、本報の視察を加地し、活力を高めようとする「5(五成増)」年に福島民報社が主催した。県内企業があるか、またなる事業を企画している企業・団体を対象に、事業の独自性・先進性、地域社会への波及効果などを総合的に審査している。表彰は3面を放し、延べ関係・団体をたたえた。

「ふくしま産業賞」に応募した には、「社業を発展させ、 会津に居くしたい」という 共通の思いがあった。県中 小企業家同友会の会員でも ある二人はふくしま産業賞 を受けた後、急速に接近し した。

「道」の駅あいつ 湯川・会 津坂下」で毎年開いている 合同イベントにも出席し、 地域資源を生かした取り組 みを来場者にアピールして いる。松崎、荒川は「地域 貢献の志をともにする他の 受賞企業とともに連携した い」と目を輝かせている。

## 会津を循環社会に

「会津の肥えた土で育て たいにも、足腰が強く持続 した落花生は必ず売れる。食 可能な古里・会津を目指し 津の農業が活気づく武器に たい」と夢見ていた荒川。

「松崎、荒川の二人は構 なる」と語るきない信念を 想を巡らせている。 抱いていた松崎。「子孫の たいにも、足腰が強く持続 した落花生は必ず売れる。食 可能な古里・会津を目指し 津の農業が活気づく武器に たい」と夢見ていた荒川。



会津への貢献を語る松崎さん(左)と荒川さん(右)

県内に根づく産業、もの づくり、先端技術をたたえ 復興へ歩む古里の活力を高 めようと創設された「ふくし ま産業賞」。賞を受けた 企業・団体には連携を強め て新たな事業に乗り出す一 方、経営改革を図るなどさ まざまな動きが表れ始め た。受賞を機に一層の飛躍 を目指す現場を巡る。

(文中敬称略)